大江戸仙境録

石川英輔

大江戸仙境録（おおえどせんきょうろく）
石川英輔（いしかわえいすけ）
© Eisuke Ishikawa 1992

1992年1月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01
電話 出版部 (03) 5395-3509
販売部 (03) 5395-3626
製作部 (03) 5395-3615
Printed in Japan

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義
製版——豊国印刷株式会社
印刷——豊国印刷株式会社
製本——株式会社上島製本所

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。 (庫)

ISBN4-06-185065-2

講談社文庫

大江戸秘境録

石川英輔

講談社

目次

稲荷町 7
芳町 31
弓 56
医師 74
士 96
本所 121
水 150
新宿 172

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

秋 199
在所 220
農 236
紅葉 254
女 279
手術 298
流 327
あとがき 344
文庫版へのあとがき 348
参考文献 349
解説 延広真治 354

大江戸仙境録

稲

窓の外には、爽やかな光があふれていた。明日から十月だ。長雨も終って、一年中で一番好きな季節が始まっていたが、私は、それを横目で見ながらワードプロセッサーのキーを叩き続けていた。

文筆家は、自由業ということになっているけれど、実際はいつも原稿の締切りに追われていて、この職業に転向する前のサラリーマン時代の方が、自由になる時間ははるかに多かったような気がする。そうかといって私のように地味な科学評論家では、締切りに追われる程度に仕事がないと、生活して行けないのだ。

自分から選んで入った道だから、今さら不平をいうつもりはないが、一年中に何日もないような爽快な日ぐらいは、せめてのんびりと外を散歩したかった。

原稿の進行が、予定よりいくらか遅れていたので、私は昼食抜きでキーを叩き続けた。おかげで、約束の一時半に編集者が来た時には、二度目の読み直しも終りかけていた。

急いでいるらしい編集者が、原稿を鞄に入れてそそくさと帰って行くのを見送ると、私は、さすがにほっとして立上がった。昨日からほとんど体を動かしていないので、大して腹は減ってい

なかったし、支度をするのも面倒だったので、外で軽くそばでも食べて来ようと思ったのだ。ついでに、夕食の買物も済ませて来れば一挙両得だ。

妻の流子は、大手の出版社で雑誌の編集者をしているので、昼間は家にいない。それに、今は校了前の忙しい最中なので、夕食の支度も私がやっておく習慣になっていた。

着替えをすると、私はいくばくかの金をポケットにいれて、マンションの3DKの部屋を出た。エレベーターで一階へ降り、いつもの習慣で郵便受けをのぞく。午前中に配達された郵便物が何通か入っていた。どうでもいいようなダイレクトメールの下に白い封書が見えた。取出して見ると、切手も貼ってなければ住所も書いてない。ただ、〈速見洋介さま〉と、私の名前だけが封筒の中央に毛筆で書いてあった。郵便局を通さずに誰かが直接入れて行ったのに違いない。

何気なくその封書を裏返して差出人の名前を見た私は、自分の目を疑った。そこには、あて書きと同じ流れるような筆跡で、〈芳町　いな吉〉とだけ小さく書いてあったのだ。

「まさか……」

私は、思わず大きく息を吸ってからつぶやいた。何かの間違いではないかと思って、もう一度、表のあて書きを見直してから裏返したが、書いてある文字が変るはずもない。

私は、しっかりした厚手の和紙の封筒を、その場でかなり荒っぽく開封した。中には巻紙が入っていた。拡げて見ると、明らかに封筒のあて書きと同じ筆跡で、手紙らしい文章が書いてあったが、古風な変体がななので、ちょっと見ただけでは何を書いてあるのかわからない。私は、そのままエレベーターへ引返した。散歩や昼食のことなど、完全に頭から消え失せていた。

エレベーターの扉が閉じて動き出すと、私は、改めてその手紙にざっと目を通した。かつて、古い文書を読む必要があって少し勉強したことがあるため、少しは変体がなを読むことができたが、拾い読みするのがやっとという程度だった。とても、気軽に立ち読みするほどの読解能力はなかった。

書斎へ戻った私は、巻紙を机の上に伸ばすと、あまり長文ではないその手紙の文字を一字ずつ読んだ。

あれよりは御おとづれもたへ〳〵に打過ぎまゐらせ候　しだいに御さむさにむかひ候へども、いよ〳〵御機嫌よく御いらせあそばし候や　こなたも息災にをりまゐらせ候まゝ御しんもじやすくおぼしめし下さるべく候　ぜひ〳〵お目にかかりたく候へども仙境と俗界とのへだて海山よりふかくけはしく、一入（ひとしお）〳〵こがれをり申し候　このふみまことに御てもとにとどいたれば、何とぞ〳〵たとへ一筆なりとても御へんじたまはりたくござ候

あら〳〵一筆申上参らせ候　　かしこ

閏（うるう）八月五日　　いな吉より

洋介さま

要するに、久しくお目にかからないが、この手紙を見たら返事を書いてくれというのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

この短い手紙を苦心して読み終えた時の私の気持を人に理解して貰うことは、到底できないだろう。読み終ってしばらくの間、私は半ば放心状態で手紙を見詰めていた。思考能力は、ほとんど停止していた。

「こんな、ばかな……」

かなりの時間が過ぎてから、私はやっと独り言をいうだけのゆとりを取り戻した。

「あり得ないことだ」

私は、確かに芳町のいな吉という人物を知っている。正確には、知っていたというべきかもしれない。だが、いな吉から手紙が来るはずは絶対になかった。いな吉は、とうの昔にこの世を去った人なのだ。それに、私は、いな吉のことをただの一度も他人に話したことがないから、誰かのいたずらということもあり得ない。

ところが、そのあり得ないもの、いな吉の手紙が現に目の前にあるのだ。そう思って見れば、筆跡も、間違いなくいな吉のものだった。これをどう解釈すれば良いのか、私には、全く見当もつかなかった。

しばらくの間呆然としていた私は、ふと、返事がほしいという以上、ほかに何か手掛かりになるものが入っているのではあるまいかと思いついて、封筒の中をのぞいて見た。案の定、底の方にもう一枚の紙が残っていて、封筒をさかさまにして机に打ちつけると出て来た。葉書ほどの大きさの上質紙を四つ折にしたもので、拡げると、ボールペンで書いた短い手紙だった。こちらは、わかりやすい現代語だった。

お心当りがおありでしたら、中野駅南口へ今日の午後三時にお越し下さい。今日がご無理なら、明日、明後日とやはり同じ場所で同じ時間にお待ち致します。

九月三十日

速見様

どうやら、この手紙を書いた人物がすべての謎を握っているらしかった。すぐに机の上の時計を見ると、まだ二時前である。軽く食事をしても午後三時には充分間に合う時間だった。私は、この手紙をまとめて内ポケットに入れると、また部屋を出た。

今度はもう散歩どころではなかったから、真っ直ぐに最寄りのバス停まで歩き、バスで中野駅へ行った。駅前のそば屋で食事を済ませると、二時四十五分になったので、ひと息ついてからゆっくりと南口へ行った。空いている時間帯だったが、それでもなるべく乗降客の邪魔にならないように改札口の左の端で待つことにして、柵に寄りかかった。

会社勤めしていた頃は、渉外の仕事が長かったので、初対面の人と会うのには慣れていたが、今日ばかりは、一体どんな人物が現われるのか気になって、どうも落ちつかなかった。

私は、期待と不安のまじった複雑な気持で、それとなくあたりを見廻していた。空いているとはいえ日中の東京のことだから、人待ち顔の人も通り過ぎて行く人もかなり多い。私を呼出した人物がその中にいて、ひそかに様子をうかがっている可能性もあった。もしそうなら、あまり、

きょろきょろしているところを見られたくないので、私は、駅前広場に視線を向けた。

「速見さんでございますネ」

という歯切れの良い声が聞こえたのは、着いてから五分ぐらいたってからだった。その声は、後方左の斜め下の方から聞こえた。私は、すぐに声の方を見た。柵の内側の改札口寄りの所に、白髪を引っ詰めて結った小柄なお婆さんが、私を見上げるようにして立っていた。

老人とのつき合いがあまりないため、見当がつけにくいが、七十歳以上にはなっているだろうと思った。地味な着物を粋に着こなした勝ち気そうだが上品な人だった。

「はい。そうです。手紙を下さった方ですね」

私は、体ごと向き直って尋ねた。相手が高齢の女性だったので、安心すると同時に、かなり拍子抜けした気分だった。

「はい。池野ゆみと申します。手紙は、お読み頂いたでございましょうネ」

強い下町なまりの早口である。

「もちろん。だから出て来たのです」

「ということは、いな吉姐さんをご存じでいらっしゃる……」

「そうです。いな吉のことは、一日も忘れたことがありません。でも、なぜあなたがいな吉のことをご存じなのですか。ぼくは、これまでいな吉のことを誰にも話したことがないから、知っている人がこの世にいるはずはないのです。なぜ、池野さん、とおっしゃいましたか、あなたがご存じなのか、どう考えてもわかりません」

まだ、駅の内側にいる池野ゆみに向かって、私は今までの疑問を一気に吐き出すようにいった。

「ちょっと、速見さん。今、そちらに出て行きますから」

池野ゆみは、困ったようにいうと、改札口で切符を渡して出て来た。

「あなたも相当せっかちなお方だネ」

「すみません。でも、問題が問題ですから……。とにかく、立ち話もできないので、そこの喫茶店にでも入りましょう」

「よろしゅうございますヨ」

ゆみがうなずくのを見て、私は先に立って歩き出した。駅のすぐ横のビルの二階が、小綺麗なレストラン兼喫茶店になっている。編集者に会う時しばしば使う店なのだ。横断歩道を渡って階段を登って行くと、池野ゆみは、しっかりした足取りで遅れることなくついて来た。

窓際の席に座って飲み物を注文すると、私は、このお婆さんの顔を見ながらいった。

「間違いないようにお尋ねしておきますが、池野さんのおっしゃるいな吉は、何をしていて、今いくつぐらいの人ですか」

「ふふっ」

ゆみは、ふくみ笑いをしてから答えた。

「芳町（よしちょう）の綺麗な芸者さんでござんしたヨ。もし今まで生きていれば、そう、百と八十にもなりますかねエ。それじゃ、今度はこちらからも伺いますけれど、あなたのご存じよりのいな吉さんと

は、いつ、どこで知り合いになられましたかネ」
「忘れもしない文政五年に、深川の梅本という料理茶屋ではじめて会いました」
私は、池野ゆみの顔をじっと見詰めながらいった。お婆さんは、うなずいた。
「それなら、間違いない。あなたこそ、あたしの探してた速見さんでござんすヨ」
池野ゆみは、懐から小さな紙片を取り出して、私の目の前で拡げて見せた。そこには、いな吉の筆跡で、〈文政五年三月八日　たつみ　梅本〉と書いてあった。指折り数えてみると、あれは確かに陰暦三月八日だった。しかし、なぜ、この人が……私は、腕組みをしながら尋ねた。
「一体、これはどういうことなんですか。どうして、あなたがいな吉をご存じなのか、いくら考えてもわかりません」
「何もそうお考えになるほどのことじゃないと思いますがねエ」
ゆみは、私の顔を見詰めながらいった。
「この私にも、速見さんと同じ秘密があるといえばおわかりでしょ。あなたも他言なさりたくない、同じ秘密でござんすヨ」
「まさか」
「まさかといいたいのは、こちらもご同様でござんすヨ。自分の同類がもう一人いるなんて、いくら信じろといわれたって、とても信じられるこっちゃござんせんものねエ」
「そうだったのか」
私は、いな吉の手紙を取り出しながら、つぶやいた。今のゆみの言葉を聞いて、あり得ないと

思っていた可能性がたった一つだけあったことにはじめて気づいたのだった。
池野ゆみのいう通り、私にはまだ誰にも、そう、妻の流子にさえ話したことのない重大な一身上の秘密があった。そして、もし、ゆみも同じ秘密のある身だとすれば、いな吉の手紙を届けてくれたとしても不思議はない。ただ、その可能性はあまり小さいので、私はこれまで考えてもみなかったのである。
「今度は、おわかりじゃろ。あたしたちは、同類同士なんですヨ」
池野ゆみは、しわだらけの小さな口を一杯に開いて笑った。私は、その顔を見詰めながら、小声で尋ねた。
「つまり、池野さんも、あちらとこちらを行ったり来たりできるのですか」
「そうそう。その通り。もう、四十年もやってますヨ」
ゆみは、うなずいてからいった。
「でも、速見さんは、今あちらへはいらっしゃれないのじゃないかネ。それとも、何かわけがあって行かないようにしていなさるのかエ。かれこれ二年ほどいな吉の所へ顔を出されんそうじゃが」
私は、憮然としていった。
「行けるものなら、今、この瞬間にでも行きますよ」
窓から見える雑然とした中野駅前の風景に重なって、重厚な土蔵造りの大店が数キロにわたって連なる大通りが、ふと目に浮かんだ。かつて、しばらく暮したことのある江戸日本橋の町並み

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton